

生理的圧痕と SOL を鑑別することが可能である。又、一見して SOL が明らかな場合でも、他の核医学検査法を併用することにより、SOL の正確な把握が可能と考える。

胆嚢床及び肝門部に欠損様所見を呈する頻度は、699 例の肝シンチで 333 例 (48%) であった。うちわけは、肝転移検索例 253 例中 118 例 (47%)、びまん性肝疾患 279 例中 140 例 (50%)、肝癌 26 例中 12 例 (46%)、その他 141 例中 63 例 (45%) であった。

肝シンチと肝・胆道シンチを併用した肝転移検索例 20 例では、10 例が肝シンチの欠損様部が圧痕と確認された。6 例は肝シンチ同様多発欠損像を示し、うち 3 例で圧痕と SOL の鑑別が可能であった。

RI アンギオを肝シンチと併用した 9 例中 Hypervascular 所見を呈したものは 5 例で、Hypo vascular 所見を呈したものは 2 例であった。肝シンチに ^{67}Ga シンチを併用した 5 例中 4 例、 ^{75}Se セレノメチオニンシンチを併用した 2 例中 2 例で腫瘍を明瞭に描画できた。RI-アンギオ及び、腫瘍シンチで Hypovascular 所見及び陰性描画例は壊死を示すとみられた。

35. Single photon emission CT の臨床経験

加藤 敏光 今枝 孟義 又吉 純一
広田 敬一 鈴木 雅義 土井 偉誉

(岐大・放)

我々は従来から使用しているシンチカメラ (サール Pho/ガンマ LFOV)、コンピュータ (シンチパック 1200) に加え、島津製回転台を用いて臨床的に single photon ECT として利用し従来の static scintigram と比較し、肝臓における defect の検出能が向上し、又その操作が比較的簡単で、要する時間も短かく、一回転で多面の断層像が得られ有用な検査法と考えられた。一方問題点として、検出器—被写体距離が長く、カメラの分解能が低下すること。患者の動きにより画像が劣化することなど将来改善されるべき点がある。

36. Subtraction radioisotopic angiography の臨床的評価

仙田 宏平 佐々木常雄 三島 厚
松原 一仁 小林 英敏 改井 修
真下 伸一 石口 恒男 大鹿 智
児玉 行弘 岡江 俊治 (名大・放)

Radioisotopic angiography (RI-AG) で得た連続動態画像を相互に減算処理する方法を前回の本地方会で報告した。そこで、今回この減算処理法の臨床的有用性を評価する目的で、得られた画像 (減算画像) の血流異常描出能をオリジナルの連続画像や X 線血管造影のそれと比較検討した。

対象は RI-AG 施行日前後に X 線血管造影を行ったある脳血管病変、大動脈瘤、肺癌、肝癌、腎癌など 15 症例であった。RI-AG は従来の手技によって施行し、その動態像は連続画像として撮像するとともに医用コンピュータに収録した。収録画像の減算処理は前回に報告した方法で行った。また、この減算処理過程で得られた加算画像に対し、一定平均バックグラウンド減算を試みた。

15 症例で得られた減算画像は、オリジナルの連続画像と比べ、特定の血流成分が選択的に描画され、病巣部の血流分布をより明瞭に描出した。この効果は他の血流成分との重なりの大い領域または血流相を描出するうえに特に有用であった。また、この効果は RI 注入法の失敗例あるいは RI-AG を直ちに反復施行した症例について高い有用性を示した。一方、減算画像で描出された血流異常像の範囲や程度は X 線血管造影で認めたそれと比べてよく一致する結果を得た。他方、早期の RI 血流像でよく描画される右心や腎の領域では、一定平均バックグラウンド減算法がこの減算処理法に劣らずよい効果を示した。

37. ^{67}Ga 炎症シンチグラフィの検討

大鹿 智 仙田 宏平 小林 英敏
佐々木常雄 三島 厚 松原 一仁
改井 修 真下 伸一 石口 恒男
児玉 行弘 岡江 俊治 (名大・放)

Ra 子宮腔内照射前後の発熱を伴う化膿性炎症の検索に ^{67}Ga シンチが応用できるかどうか検討した。対象は Ra 治療を施行した子宮癌患者の内 (術後でない者) すなわちタンデム線源の挿入できる者とした。方法は Ra 治